

# 戦火の中から（終戦時十七歳）

小 高 幸太郎

東中野一丁目

私は、一九四五年（昭和二〇年）八月十五日正午、沖電気芝浦工場の屋上で、無条件降伏を告げる天皇の放送を聴いた。此の日を以て軍国主義日本は崩壊し、十五年戦争といわれた、満州事変、支那事変、大東亜戦争もようやく終結した。生き残った人々は、あの悪夢のような空襲地獄から解放された。私は、軍隊生活の厳しさは話に聞かされていたので、もう兵隊に行かないで済む、戦死する事も無くなった、というのが実感であった。

私の家族は、幸いにも一人の犠牲者も出さずに生き残った。両親と弟四人の七人家族である。次弟は上野の岩倉鉄道学校へ通学し、三人の弟は小学生で埼玉県に学童疎開していて無事であった。私達親子四人は、焼け出されてから、母校である京橋昭和国民学校（現在は中央区立城東小学校）の講堂で共同生活が始まった。私は工場の残務整理に当たっていた。両親は焼け跡の片付けで毎日が過ぎていった。当時の物不足は極端にひどく、なかでも食糧不足は極限に至った。戦争で助かった命も、食べ

物が無い為に餓死する人が大勢いた。上野駅の地下道は身寄りの無い人々でいっぱいであった。毎日のように何人かの餓死者が出たということである。腹が減って、あんな惨めな思いをしたことはなかった。

後になって復員して来た兵隊の話であるが、南方のある島で戦い、部隊のほとんどが戦死をした。重軽傷を負った戦友もいたが、手当の仕様もなかった。水も食物もなく、ヘビヤトカゲや野ネズミをつかまえて食べた。傷付いた戦友は次々に餓死していった。生き残った戦友達は、とうとう死にかけていた戦友を殺して食べた。それから、お互いにいつ殺されるかわからないので、夜は木の上に登って寝たというショッキングな話を聞かされた事もあった。

九月に入ってから、米軍を初めとする連合軍が進駐して来た。私達は進駐軍と呼んだ。焼け残ったビルやアパート等が接収されて進駐軍の宿舎になった。銀座四丁目の服部時計店がPXとなり、銀座通りにアメリカ兵が大勢銀ブラをしていた。

私達がいた小学校の隣に木戸ビルがあった。内部はすっかり焼けてしまったが、一・二階が改装され、キャバレーになった。ダンサーの募集が始まり、若い女性達が集まり、毎夜米軍が入りするようになった。ホールが終ると、酒に酔った米兵とダンサーが三々五々周辺の闇へ散っていった。小学校の校舎と堀の間の植え込みが絶好のセックス場だった。私は教室の前の廊下の窓からそっとノゾキ見をしたこともあった。ある時、キャバレーで白人兵と黒人兵の乱闘騒ぎがあり、発砲する事件が起きた。女性の取り合いが原因だったということである。

私達家族がバラック生活をするようになってからは、夜になると米兵と女性（当時パンパンガールと呼んでいた）がよく入って来るようになり、部屋を貸せとのことであった。米兵の英語など私達に通じる筈もないので、女性が通訳した。父は「困ります。帰って下さい」と断ると、酔った米兵は「ヘイ、シャラップ」と言うが早いか父にパンチを浴びせた。そしてバラックの戸を蹴つ飛ばしながら出て行った。私達はくやしさと恐怖の一夜を明かした。あくる日、警察に訴えたが、進駐軍の事件は日本の警察は手出しが出来ず、話し相手にもされなかったばかりか、夜は戸締まりをして誰が来ても外へ出るなど言われた。人々は、それぞれ自分の焼け跡を片付けて、バラック生活をするようになった。私も父と共に6帖位のバラックを作った。焼け跡の隣が建築会社の材料置き場になっていて、コンクリー

トが厚く打ってあった。私達家族は、行く所が無くなってしまつて、焼け跡に居直るしかなかった。焼ける前は、父が働いていた「ひょうたんや」という薬問屋の二階を家族ぐるみで借りていた。母は社員の食事をまかっていた。五月二十五日の空襲で焼けてから、「ひょうたんや」は目黒の元競馬場へ移り、父は失業した。

建築会社もどこに越したのか行先がわからなかった。材料置場には、直径7・9ミリメートル位の鉄の丸棒が錆びたまま束ねて置いてあった。連絡の仕様もなかったもので、無断借用してバラックの骨組みに使った。父は器用で何でも一応は出来た。特に大工仕事は人に頼まれると引受けた。大工道具も一式揃つて大事に防空壕に入れてあった。私も父の血を引いて器用である。母は生前、父の事を器用貧乏だと言っていた。鉄棒を家の形に曲げて立て、横の鉄棒と針金でしばりながら、トタンの幅位に間を置いて作った。トタンは焼け跡から拾い集めて来て、下の方から少しづつ重ねて針金でしばっていき、一日で出来上がった。コンクリートの上に建ててあるので、風が強く吹く日は家ごと動き出した。穴だらけのトタン屋根だから、雨の日はどしゃもりであった。便所も作った。戦前から水洗便所だったので、路地の真ん中にマンホールがあり、下水管が通っていた。マンホールの廻りをトタンで囲い、使用後はバケツで水を流す水洗便所である。使用中下を見ると、子猫程もある大きなドブ

ネズミが行き来して、遅しく生きていた。

新富町に戦災を免れた銭湯があると聞いて、久し振りに入りに行った。ものすごい混みようであった。脱衣籠の空くのを待って裸になり、湯船の縁に並んで誰か出るのを待って入るのだ。湯は汚れて垢が浮いていた。何日も入っていない人が湯船の中で身をこするから汚れ放題だ。上り湯も水しか出ない。水を頭からかぶって出てしまった。今度は、自分の脱いだ衣服が無くなっていた。越中フンドシまで持っていかれてしまった。裸では帰れないので、他人のを着て帰った。下駄も無くなっていた。一番最後の人はどうするのだろうか、そんなことを考えながら家に帰った。

俗に言う板の間稼ぎに会って、板の間稼ぎをしたことになった。もう二度と銭湯に行く気がしなかった。そして風呂も作った。焼け跡からドラム缶を拾って来て、上部を抜いて、三方へ土台石をコの字に置いて、廻りをトタンで囲い、露天風呂が出来た。水道が出たので何より助かった。防空壕の中には、三升炊き、一升炊きのお釜、おはち、食器、写真、毛布、アンカ等、色々入って無事であった。昔の人は物を大切にせる教育を身をもって体験している。母は九人の子を生み、貧乏が災いしてか四人の子を病気で失い、私達五人の男子を立派に育てた。身を粉にして働いた母は気丈夫であった。決して愚痴をこぼさなかった。いつごろからか、心臓を病んでいた。戦後は疲れが目

に見えるようになった。それでも口には出さなかった。

九月に入ってから、私達少年工の首切りが発表された。私がいいた海軍工場では、私を含めて五人が残され、他の者達は解雇された。一歳年下の地方出身の少年工達も解雇され、それぞれ故郷へ帰った。弟達三人も疎開先から帰って来た。窓ガラスの無い教室で授業が始まった。

東京駅八重洲口には、汽車の切符を買う人が、毎日徹夜で橋の上は何百人も列を作った。彼岸もすぎると夜は冷えて来る。私達兄弟は頼まれて、交替で場所取りをやり、何がしかの賃金を得た。米を持っている人が母に握り飯を作ってくれと頼みに来るようになった。幸い釜はある。父はレンガを拾って来てカマドを作り、焼け跡から焼棒杭等、燃える物を集めてきた。私は八重洲橋の下を流れる城辺川に流れて来る木材を取りに川に降りた。空襲では役に立たなかった鳶口がここで役に立つとは思わなかった。流れて来た木材を引っ掛けて岸へ引き寄せるのに使った。

口コミで次から次へと握り飯作りが始まった。父が飯を炊いた。薪で炊くと釜の底におこげが残った。おこげが私達の腹に入った。もう一つの釜で湯を沸かし、握り飯を食べて行く人に湯のサービスをした。お茶っ葉を持っている人がいて、母は少し分けてもらい、葉缶に入れて、湯飲み茶碗を持って、母と私は八重洲橋の上の行列の人達に一杯十銭で売りに行った。これ

が大当りだったが、お茶葉が無くなってしまった。東海道線の堀の内駅前にお茶問屋があると教えてくれた人がいたので、私は早速買い出しに行った。一貫目が二〇円か三〇円位だったと思う。持てるだけ買って来た。お茶はガサばって客車に乗るのがひと苦労であった。東京まで無事に帰ると、五倍位になった。世の中そんなに甘くはなかった。五回に一度は食糧統制法とやらで警察に取上げられてしまった。

東京への列車は、買出し列車と呼ばれ、人々は地方の農家へと買出しに行った。武士は食わねど高楊枝などと言っているのは餓死してしまう。現に配給の食糧しか食べなかった判事が、飢えて死んだ事件まであった。生きる為にあらゆる知恵をしばった。米を背中にしょってねんねこ伴天を着て、帽子を被せて赤ちゃんをおぶったかっこうをし、官憲に会うと、子守歌を歌って赤子を寝かしつけているように見せている中年の婦人がいたが、官憲の目はごまかす事は出来なかった。官憲は見逃す振りをして、「よく眠っているな」と言いながら赤子の帽子を取り、「よし重かったらう、俺が抱いてやるから降ろせ」と笑い話みたいな光景まで見られた。イタチごっこの繰返しであった。

私も、工場で仲の良かった地方出身の少年工を訪ねて、東北方面へ買い出しに行った。上野から仙台まで身動き出来ない程の混みようであった。四人掛けの座席に六人が掛け、その間にも二、三人がしがみ、通路は立ったままぎゅうぎゅう押し込

まれ、洗面所も便所の中まで満員であった。窓にも腰掛けていた。駅に着く度に便所へ行く人が窓から出入りした。男はホームの反対側で立ち小便をした。女はホームのはずれの便所へと走った。列車は遅れに遅れて、仙台まで長い時間であった。機関車の煙が目にしみて、息苦しい思い出である。帰りの列車はもっと大変である。荷物を背負い、両手にも持った人達が各駅から乗り込み、ホームには乗れない人もいた位だ。子供連れの人は大変である。買出し列車は死に物狂いであった。大宮あたりまで来ると、下り列車の人から、「上野で一斉取り締まりをやっている」とか、「今日は赤羽でやってるぞ」と言って、せっかく買った物を没収されないように互いに助け合った。上野でやっている時は、赤羽で降りたりした。運悪く降りた駅でやっている時は線路へ飛び下りてよく逃げたものだ。

買って来た物を強制的に取り上げるのは、官憲といえどもドロボー的行為である。没収した食糧品等はどう処分されたのか、私には今だに疑問である。戦災から命からがら生き残った人々はこの悪法の為、餓死者が出た事も忘れてはなるまい。東京駅も、私共の住まいと共に二〇年五月二五日に焼失したので、手荷物等の預ける所がなかった。駅から一番近いバラックが私の所だったので、荷物を預かってくれという人が何人も来た。その日の内に取りに来ない人もいて、夜寝る所が無い始末であった。

私は毎日工場の整理ばかりやらされて、少し厭あきが来ていたので、十二月で退職した。そしてもっと大きなバラックを作り、手小荷物の預かり所を始める事になった。元住んでいた焼け跡を片付けて、父と二人で、店と住いとを仕切ったバラックを作り、駅から見えるように看板を屋根に付け、一時預かり所を開業したのである。一九四九年（昭和二十四年）四月に現住所に越すまで続けた。その間いろいろな事があったが、今日まで生きていられたのは、この時代を乗り越えられたことが実に大きな起因となったのである。

そして現住所に土地を買い、プロの大工さんの建てたバラックに越して三日目、母は、やっと自分達の土地と家を持ったことに安堵したのか、力尽きて床に就き、五三歳の生涯を終わった。父は六五歳で亡くなった。私も今年で父と並ぶ年になった。父に代わって私は訴えたい。人間同士が殺し合う戦争は二度としてはならないし、させてはならない。戦争体験の無い人達に声を大にして訴えたい。私の生涯に、戦後は終ったという日は来ない。

